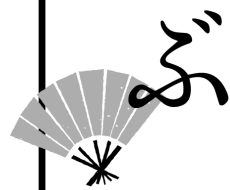


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第四十二回 十徳

八

つつあんが床屋で仲間とワイワイやってると、表を隠居が見たこともない着物を着て通り過ぎた。

「おい八、おめえ隠居と親しいよな。あの着物は何てえもんだか知ってるか」

「いや、知らねえ。オレも初めて見た。いま行って聞いてくらあ」「こんちわ、ご隠居いるかい?」

「おや、八つつあんじゃないか。まあお上がりよ」

「さっき床屋の前を妙な着物を着て通ったでしょ。あ、掛けてあるそれだ。これ、何てえもんです? 誰も知らねえんで、代表して聞きにきました」

「これか。今は着る人も少なくなってるな、主に茶人や俳人が着てるが、十徳^{じゅとく}というもんだ」

「十徳? 変わった名ですね。どうしてそんな名がついたんです?」

座

「聞いた話でこじつけみたいなのもんだが、これを着て立つと裾にヒタがあるだろ、だから衣の如く^{ごと}(五徳)だ。

るとふわりと広がり羽織の如く(五徳)だ。で、五徳、五徳で十徳となったな」

「ははあ、如く如くで十徳ですか。こいつは驚いた」

「ところで八つつあんは両国橋をご存知か?」

「へい、毎年、花火を見に行きます」

「では両国橋のいわれをご存知か?」

「いや、知らねえ」

「あれは下総^{しもさのくに}国と武蔵^{むさしのくに}国をつないでるな。国と国で両国橋となった」

「あ、なるほどねえ」

「まだあるよ。では一石橋^{いちこくはし}をご存知か?」

「日本橋の先の?」

「そうだ。昔、あの橋は八つ見橋と言った。あの橋から八つの橋が見えたからだ。ところがある年、大水でこの橋が流されてしまった。そこへ金持ちの二人の後藤さんが、私たちで橋を造りました。そこへ名乗り出た。橋ができて二人の名をつけたいが、後藤後藤橋では語呂が悪いだろ。そこで升目から借り、後藤を五斗とした」

「ああ、一升が十で一斗ってやつ？」

「そうだ。五斗と五斗を合わせて一石になるだろ。で、一石橋になったんだ」

「なるほど、シャレが入ってるわけだ」

「そう、何事にもいわれがあつて、知ると面白いもんだよ」

「いや勉強になりました。ありがとうございました」

「もう帰るのかい。ゆっくりしてきなよ」

「いえ、いま仕入れた話を連中に教えてやりますんで」

「お、八が戻ってきたぞ」

「おいおめえら、両国橋のいわれを知ってるか」

「下総国と武蔵国をつないでるからだ」

「あれ、知ってやん」

「そんなことは子どもでも知ってるよ」

「では一石橋のいわれをご存知か？」

「あの橋はな、〈中略〉後藤後藤橋じゃ語呂が悪い。そこに知恵者がいてな、升目から借りれば後藤は五斗につながると言っただ。ほら五斗に五斗を足しゃ一石になるじゃねえか。で一石橋になったんだ」

「その通りだ」

「それはそうと、その隠居が着てた妙な着物はどうなった？」

「あ、忘れてた」

「しっかりしろよ。それを聞きに行ったんだろうが」

「あれはな、十徳というもんだ」

「十徳？ 変な名だな」

「何にでもいわれはあり、いわれを知ると面白いもんだ。あれを着て立つと、裾にヒタがあり衣のようだ。あれを着て座ると、ふわりと広がり羽織のようだ。な、ようだようだ……で、やあだ」

「いやならよしねえな」

「いや、違う。どこを間違ったかな。あれを着て立つと、裾にヒタがあり衣みてえだ。うん、これでいい。あれを着て座るとふわりと広がり、羽織みてえだ。な、みてえみてえ……で、むてえだ」

「眠てえのか」

「惜しい。近いところまできてるんだけどな。よし、今度は大丈夫だ。あれを着て立つと、裾にヒタがあり衣に似たりだ。よしいけるぞ。あれを着て座ると、ふわりと広がり羽織に似たりだ。似たり似たりで……」

「どうした？」

「いや、これはしたり」



こ
れが『十徳』という落語です。いかがでしょう。十徳がどういう着物であるのか、少しはイメージが湧きましたでしょうか。どうしてもイメージが浮かばないという方は、十徳で検索してみてください。たちどころに写真等が出てきて、なるほどこれが十徳かということになりますから。

前座はなしですが、各所に物知りになれる要素が潜んでいます。中でも両国橋と一石橋のいわれはためになりますよね。長くはありませんので、これを機にぜひ覚えてみてください。